

## 見学型→参加型実習転換への課題と展望

北川 均 参加型実習検討 WG 代表

岐阜大学応用生物科学部

獣医学教育モデル・コア・カリキュラム（コアカリ）が制定され、各大学ともその実施に向けて準備を進めている。総合参加型臨床実習もその一つである。獣医学共同教育を実施する大学は、参加型臨床実習をコアカリに準拠して実施し、参加型臨床実習を小動物と産業動物に分け、小動物は両大学で実施するが、産業動物はどちらかが分担して実施するということである。

コアカリによれば、参加型臨床実習は、基本的診療技能（医療面接、インフォームドコンセント、基本的な診療法等）を習得したうえで、実際の患者に対して習得した基本的診療技能を用いて診療行為を実施し、臨床経験を積むことになっている。このことは、小動物臨床も産業動物臨床も同じである。

参加型臨床実習の実施に必要なことは、「学生全員が参加できる診療の場」であり、そのためには1) 診療行為を指導できる教員が十分存在すること、2) 基本的な診療技能を用いるための基本的な疾患の患者が十分にあること、さらに3) 多人数の学生を収容できる施設があることの3点である。

参加型臨床実習を実施するうえで必要な事項を岐阜大学を例にして、問題点を挙げる。まず小動物については、岐阜大学は附属動物病院があり、参加型臨床実習の場として使用できる。小動物臨床担当教員は現在13名であり、研修医や動物看護師の協力も得られるが、数名の学生を数班に分けてローテーションを行うには明らかに不足し

ている。また、岐阜大学動物病院は2次病院を標榜し、開業獣医師の紹介患者が診療対象であるため、比較的軽度で難易度の高い疾患がほとんどである。参加型臨床実習は、将来臨床分野に進まない学生も参加するので、基本的な診療技能を用いるための基本的な疾患の患者を診療することが好ましい。基本的な疾患の患者すなわち一次診療の対象となる患者を確保することが今後の課題である。さらに、面積については、岐阜大学には2大学の共同教育（1学年65名）に対応できるようなスペースはない。現時点ではそれぞれの大学で実施する予定であるが、2大学の学生の共同教育となれば、診療室面積の確保も重要な課題となる。

産業動物については、コアカリでは特に動物種を指定してはいないが、日本において実際に個体診療が行われているのはウシであり、ブタやニワトリについては家畜衛生学実習の領域の内容となる。ウシを対象とする参加型実習で問題になるのは、やはり指導教員と診療対象動物の確保である。指導教員については、各大学とも少数の農業共済組合（NOSAI）出身の教員が存在し、不足していることは明らかであるが、まったく指導できないということは無いようである。ウシの診療は往診が主体であるため、診療の現場である畜産農家の確保が必要となる。岐阜大学では、少数頭であるが近隣の酪農家を対象として3名の教員が往診を行い、参加型臨床実習はこれとNOSAIでの診療随行を併用して実施している。しか

し、往診対象である畜産農家を確保している大学は少なく、技術を持つ教員が腕を振る場が無い状況にある。参加型実習を近隣のNOSAIに委託することも方策であるが、特定大学のみの受入れは可能であっても、年間450名以上の受入れは不可能であることをNOSAIとして明言している。NOSAIの職員は、教育が本業ではなく、多忙な診療時間を割いて教育にあたっていただくことには限界がある。

参加型臨床実習をやらないという選択肢はない。その実施については、小動物、産業動物とも、教員、面積等に加えて診療対象動物（患者）の確保が必要であり、獣医師会等の協力を模索し、早急に準備する必要がある。